

高め合うこと

－ ライバルと築く関係のアリカタ －

K.N

『私は私のままで生きることにした』

『聖書 新約聖書』テサロニケの信徒への手紙 I 5章 11節

だから、あなたがたは今しているように、互いを慰め合い、相互の徳を高めなさい。

This report is about to improve each other.

Generally, everyone meets a rival once in their lives. It's up to you if you can the relationships better or worse.

This report concludes that in order to build a good relationship, it is necessary to respect other people and maintain proper distance. Too much attention or too much interference in the others can lead to a bad relationship.

キーワード:高め合う、ライバル、尊敬

1. 問題と目的

この論文テーマは「高め合うこと」である。

誰しも人生に一度は「ライバル」にあたいする存在に出会うのではないだろうか。一言にライバルといっても、人によって抱くイメージが少し異なると思う。それは、ライバルとの関係の築き方が様々で、それが良い関係のもの、そうでないものがあるからだ。では、ライバルとお互いを高め合う、良い関係を築くにはどうすればいいのだろうか。このレポートでは「私は私のままで生きることにした」という本をもとに、高め合うことについて考える。

2. 先行研究

このテーマについてTさん(2021)を参考にした。Tさん(2021)は新約聖書ヤコブの手紙 5章 1-3節とガラテヤ書 5章 26節、「嫌われる勇氣」(岸見一郎/古賀史健著)をもとに優越感と劣等感について

考察していた。自分の成績に対して優越感や劣等感を抱いた経験から、よりよい自分であるために他者と自分の比較をせず、自分自身の中での意味のある比較をして成長につなげていくべきだ、と述べた。

3. 方法

1. 『私は私のままで生きることにした』 キム・スヒョン
2. テサロニケの信徒への手紙 I 5章 11節-13節
3. 自分の経験、自分の考えなど

4. 結果

1. 『私は私のままで生きることにした』 キム・スヒョン

この本では、自分らしく生きるにはどうすれば良いのかを著者の経験をもとに書いている。その中で、著者の考えに強く共感した部分がある。「良い関係とは、お互いの境界を尊重することであり、良い友情とは親密でありながらも安定感が得られる距離を保ち、愛情を持って結びつくような関係のこと。」裏を返すと、過度な関心、干渉は良い人間関係を生まない、ということだ。なぜならそれらは、必要のない比較の材料となり、嫉妬や憎悪につながるからだと考える。「あの人には負けるわけがない。」「あの人よりは上だ。」これは必要のない比較。「あの人のようにするには ...」「あの人に勝てるように頑張ろう」これは必要のある比較。必要のない比較と、必要のある比較の違いは一つ、相手を「尊敬」しているかだ。

尊敬というのは、この本の引用箇所という、「お互いの境界を尊重する」「愛情をもつ」ということの総称ではないだろうか。ライバルと、必要のある比較の意識を互いに持つことで高め合えるのだと、私は考える。

2. テサロニケの信徒への手紙 I 5章 11節-13節

この論文を書くにあたって参考にした聖書箇所は、テサロニケの信徒への手紙 I 5章 11節-13節である。テサロニケの信徒への手紙 Iは 紀元(A.D.)50~51年頃に、パウロがテサロニケの教会に向けて書いたものだ。この箇所は使徒パウロがテサロニケの信徒たちに、無意味な争いを避けるべきであり、そのかわりに互いに仲良く生きていくべきだ、と述べたときのものである。無意味な争いとは、互いを否定し合う争いのことだと考える。そしてそのような争いを避けるためには、愛を持って互いを尊重すべきだということがこの箇所か

ら読み取れた。

3. 自分の経験、自分の考えなど

私は学年50人、全校生徒200人にも満たない小さな小学校に通っていた。だから私にとって近江兄弟社中学校は、今までより競い合う規模が大きく、また、競い合うことが多い世界だった。その中でも、点数や偏差値など数値として勝ち負けが顕著にあらわれるテストは、自分の中で比較する対象が多かったものだ。1点差で勝ち負けが決まる世界。こんな小さな差に一喜一憂する環境は、人によっては苦しいものかもしれない。しかし、私にとっては勉強に励む大きな原動力となっていた。負けた時はもちろん悔しいが、嫉妬心がうまれることはなかった。競い合うけれど、敵ではなく、一緒に闘う戦友のような存在が、私が思う、私のライバルだ。ライバルとこのような関係を築くことができたのは、やはり、相手への「尊敬」があったからだろう。

5. 考察

以上、本論文では「高め合うこと」というテーマについて検討を行ってきた。本では、過度な関心や干渉は必要のない比較をうみ、良い人間関係を築くことにはならない、ということを学んだ。今までの経験からは、ライバルと高め合う関係を築くには、「尊敬」が必要であることを知った。これらのことから、ライバルに過度な関心や干渉をせず、相手を尊敬することで、高め合う関係を築くことができると考える。

【参考文献】

『私は私のままで生きることにした』

キム・スヒョン (2019年) ナショナル製本 (株式会社ワニブックス)

『聖書 新共同訳』テサロニケの信徒への手紙 I 5章 11節 (日本聖書協会)

時 間

T.T

『世界が変わる現代物理学』竹内薫（筑摩書房）

『聖書 旧約聖書』創世記 1章 1節

神は天地を創造された

This report is about “time”. Generally, most people say that time is length between one time and another time and a lot of people think that time was made by God because they believe the Bible. However, a lot of scientists say that there is not time in the world. I think scientists are right. This report concludes that time is made by people.

キーワード：時間、現代物理学、聖書

1. 問題と目的

この論文テーマは「時間」である。

一般的に「時間」とは一般的に時の長さや時の流れのある一点からある一点までと定義される。時間は生物の外にも存在しているもので、方向があるものだと考えられている。

また、相対性理論の発表までは全員が同じ時間を感じていると考えられていた。しかしアインシュタイン方程式や宇宙の観測によって宇宙が膨張していることが予測されると、宇宙が永遠に変化しないものではなく始まりがあると考えられるようになった。

そしてこの宇宙の始まりにあったと考えられるビッグバンとともに時間も出来たと考えられるようになった。ただ、この説では現在の宇宙に時間があることが前提となっている。この前提が正しいものかどうかを検証するためこの論文では時間とは誰が作り出したものなのか検討したい。

2. 先行研究

このテーマについてNさん(2021)を参考にした。Nさん(2020)の宇宙ができて初めて時間の流れができたという結論と、キリスト

教においては 神様とイエスが時間の原点だという結論を参考に時間というテーマについて、時間がいつまで続くかは宇宙の外側にある、あるものの質量の値によって決まるため時間がいつ止まるかは分からず、今を大切に生きることが重要だと述べている。また、聖書によると時間の終わりはキリストの考え次第だということも述べられていた。

但しこの論文では時間が存在しているものだと仮定している。本論文では時間が生物の意識の外にも存在しているものなのかを明らかにすることを目的とする。

3. 方法

1. 『世界が変わる現代物理学』 竹内薫
2. 創世記 1章 1節
3. 自分の経験、自分の考えなど

4. 結果

1. 『世界が変わる現代物理学』 竹内薫

この本では、現代物理学においては世界の根源にはノードとリンクと呼ばれる抽象的なネットワークか、ループしか残らないと述べられている。また、時間とは空間について「時間と空間という固定化された『入れ物』あるいは『枠』を無条件に想定することはしません」(191ページ 5行目)、「ループ量子重力理論は、あらかじめ時空を仮定しません。」(201ページ 7行目)と書かれている。つまりこの本では時間や空間は関係性のネットワークから二次的に導き出すことができるということを伝えていることがわかる。

2. 創世記 1章 1節

この論文を書くにあたって参考にした聖書箇所は、創世記 1章 1節である。創世記は紀元前(B.C.)400年頃までに、イスラエルでバビロン捕囚の帰還後ユダヤ教徒に向けて書かれたとされている。創世記 1章 1節は独立した表題文である。「天地」は対語であり「万物」という意味に解することができる。この「万物」には時間も含まれていると解釈することができる。

3. 自分の経験、自分の考えなど

卓球用の球や理科実験用の力学台車などは等速直線運動をしていることがある。また安定した軌道を持つ天体はほとんど一定の運

動を続けている。このような運動を撮影して逆再生しても大きな違和感なく見ることができる。これはエントロピーの変化が小さいことが原因である。エントロピーとは無秩序な状態の度合いや乱雑さを表し、乱雑であるほど大きくなる。反対に重力に従って卓球用の球や人が落ちている様子を固定したカメラで撮影した映像を逆再生した場合大きな違和感を感じる人が多い。これはエントロピーが増大していることを私たちが認識することができるからだ。つまりエントロピーの変化を感じ取ることができなければ、私たちは時間を認識することはできない。このことは普段の生活から導き出すことができるし、カール・ロヴェッリ氏などの物理学者もこの説を支持している。

5. 考察

以上、本論文では「時間」というテーマについて検討を行ってきた。

本では、世界の根源に時間という概念は存在していないことが分かる。

聖書箇所からは、時間は神が天地を想像したときに他の様々なものと同時に作り出したものだということがわかる。今までの経験からは、生物がエントロピーの増大を感じ取ったときにそれを時間として認識しているだけだということがわかる。

この内、聖書箇所から分かったものが他の2つと矛盾している。宗教の為の書物として書かれた聖書は成立年代が古くそこに書かれていることは、実際に観測されたデータに基づいた根拠に乏しいことが多い。それに対して科学では観測結果に基づいて論理が作られている。よって科学の方が信頼できると考えられる。

先行研究においても科学の方が信憑性が高いと考えられており、これまでも科学とキリスト教の主張が対立したときは科学が正しいことが多かった。例えばキリスト教においては天動説が支持されていたが、実際は科学的な根拠に基づいた地動説が正しかった。このようになった原因は、宗教が先行研究の西田(2021)が指摘したように「人々は信仰をすることで心の安定を図っていた」ことや、認知革命に代表されるように人々が同じものを信じることで団結することを目的としたものであり、正しいことをひたすらに追求することを目的としたものではないということであると考えられる。

これらのことから、より正しい可能性が高いと考えられる科学的

根拠に基づいた時間が存在していないという主張が正しいと考えられる。

【参考文献】

- 『世界が変わる現代物理学』竹内薫（2004年9月10日）（筑摩書房）
『聖書 新共同訳』創世記 1章 1節（日本聖書協会）

善と悪

A.S

『飯待つ間』正岡子規

『聖書 旧約聖書』創世記 3章 1節-24節

それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存知なのだ。

Abstract:What we try to be is more important than what we actually are.

キーワード:善悪、過程、結果、判断

1. 問題と目的

この論文テーマは「善悪」である。このテーマについて、道義的に正しいことや倫理に沿った行い、または集団において望ましい行為や事柄を「善」とし、その反対を「悪」とするのが一般的な考え方である。しかし、道義や倫理は個人の価値観に依存する部分が大きいため、普遍的な基準とはいえない。また、「集団において望ましい」というのも曖昧で判断がしづらい基準である。

以上の理由から、本論文ではより汎用性の高い善悪の基準を発見することを目的とする。

2. 先行研究

このテーマについてIさん(2021)を参考にした。この論文では、人間には善悪の基準が分からないと述べられている。しかし、人間が集団をつくり、社会の中で他者と関わり合いながら生きている以上、善悪を判断する基準は必要なものである。そこで、私は可能な限り多くの人が納得できるような善悪の基準を提案する。

3. 方法

- 『飯待つ間』正岡子規
- 創世記 3章 1節-24節

3. 自分の経験、自分の考えなど

4. 結果

1. 『飯待つ間』正岡子規

この本に収録されている『恋』という随筆では、「八百屋お七」という浄瑠璃や歌舞伎のヒロインとして有名な少女についての、正岡子規の見解が述べられている。この文章の中で、子規は、お七が自分の実家に火をつけたことについて、次のように述べている。

「火を付けたのは、しょうかせまいかと考えてしたのではなく、恋のためには是非ともしなくてはならぬ事をしたものを、なぜにその事についてお七が善いの悪いのというて考えて見ようか。もしそれを考えるほどなら恋は初から成り立って居なかったのだ。」

この箇所から、善悪の考え方が及ばないものもこの世には存在するという考え方もあることがわかる。

2. 創世記 3章 1節-24節

この論文を書くにあたって参考にした聖書箇所は、創世記 3章 1節-24節である。創世記はさまざまな集団によってさまざまな時期に編集されたもので、明確な成立年代を特定するのは難しい。

この聖書箇所では、エデンの園でアダムとエバが蛇に誘惑され原罪を犯し、神にエデンの園から追放されるまでの様子が描かれている。

神は善悪の知識の木から実を取って食べてはいけないとあらかじめ二人に伝えている。つまり、二人はその行動が神から悪と見なされることは知っていたはずだ。にもかかわらず、二人は木から実を取って食べてしまう。その後、神に問いただされた二人が他者に責任を転嫁している場面からも、やはり二人には「自分たちが神に悪と見なされることをした」という認識が、はっきりとあったことがわかる。

また、蛇が「食べよ」と要求することはなかった点にも注意が必要だ。蛇はあくまで「食べると神のように善悪を知るものとなる」という事実を告げただけである。つまり、二人は蛇の誘惑があったとはいえ、完全に自分たちの意思で神との約束を破ってしまったことになる。

しかし、神を全知全能で最高の存在とするならば、そんな神のようになるという結果そのものは、悪いこととはいええないはずである。この場合、問題なのはそこではなく、それを傲慢にも人間が望んだとい

うことだ。

これらを総合的に考えると、神が罰したのは、実を食べて善悪を知ったという結果ではなかったことになる。その行為が神に悪と見なされると知りながら、自らの意思で木の実を取って食べ、自らの意思で悪を選び取った、その一連の行動に対して神は罰を与えたのである。

3. 自分の経験、自分の考えなど

功利主義という考え方がある。行為や制度の正しさが、その結果として生じる効用によって決定されるとする立場のことで、「最大多数の最大幸福」を原理とする。

私は、物事について判断する際、その行為の結果よりも意図や経緯を重視する傾向にある。なぜなら、結果には意図や手段といった行為の本質に関わるもの以外に、その時限りの外的要因や能力的な問題など、変化し得る要素が含まれているからだ。そして、それらは行為の本質を見たい場合には不純物となる。それが本来どうなるはずだったのか、それがどうしてこうなったのかを考慮しなければ、その行為の本質は見えてこない、というのが私の考えである。

しかし、社会の中で人間が活着している以上、結果およびそれが周囲に及ぼす影響はやはり無視できないものだ。そうして生まれたのが冒頭で紹介した功利主義である。

ある行為において、その意図や手段がどれだけ周囲に良い影響を及ぼし得るものだったとしても、それらを加味しても看過できないレベルの悪影響を結果的に周囲に与えてしまったのなら、その行為は悪だと言わざるを得ないだろう。

5. 考察

以上、本論文では「善と悪」というテーマについて検討を行ってきた。聖書箇所からは、神が行為の結果よりも意図や過程を重視した例があったことがわかる。今までの経験からは、物事の本質を見たい場合には意図や過程を判断基準とする方が良いが、結果を完全に無視することもできないことがわかる。本からは、そもそも善悪は万能ではなく、善悪では測れないものも存在すると考える人がいることがわかる。

これらのことから、まずその事柄が存在するに至るまでの過程に注意し、次にその事柄が生んだ結果と過程を天秤にかけて、どちら

が重いか検討するというのが最も汎用性の高い善悪の判断方法であるといえる。しかし、善悪以外の観点からものを考える人がいることも忘れてはならない。この論文で善悪に明快な判断基準が見つからなかったように、物事そのものの判断基準も、明快な一つの最善策を見つけることは簡単ではないのだろう。それでも、できる限り最善に近いところに在ろうとする姿勢が、重要なのではないだろうか。なぜなら、本論文で結論づけたとおり、善であろうとする姿勢は善だからである。

【参考文献】

『飯待つ間』正岡子規（1985）（岩波文庫）

『聖書 新共同訳』創世記 3章 1節-24節（日本聖書協会）